



Title	中国哲学史研究ノート〔四〕
Author(s)	加地, 伸行
Citation	中国研究集刊. 1989, 7, p. 30-32
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/61219">https://doi.org/10.18910/61219</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 中国哲学史研究ノート（四）

加地 伸行

このノート、本誌に登載すべきものが多かったため、しばらく休載していたが再開する。

さて、このノートは、若い研究者や大学院生の悩みの解決のために書きはじめた。これだけ情報化された時代であるにもかかわらず、研究者間共通の研究ルールができていないので、結局各自が見よう見まねで、論文や報告を書くのが実情である。その手探りの中で、若い研究者や大学院生がどのように書けばよいのかと悩んでいる。その解決の一助にと思って、このノートを書きはじめたのである。

と記せば、大方の大先生は私を笑うことであろう。そんな子どもじみたことをする必要はない。書きかたは、いい論文を読めばわかる、と。そのとおりである。しかし、私は大先生のよいうな古き良き時代のエリート相手の教師ではない。いまは研究者も大衆化の時代である。本来、エリート研究者に対して教育の必要はない。無為自然流の指導で十分であろう。しかし、現在のような大衆研究者には、有為規制の指導が必要なのである。

現在、私は大阪大学の学生に論文や報告をどのように書くかという指導を行なっている。もちろん、まとめて「論文の書きかた」などといった講義をするわけではない。さまざまな機会を通じてのさまざまな指導である。上は学問や人間のありかたから、下は誤字の訂正に至るまで多種多様である。

これらの経験の中から、より一般的、より包括的なものをこのノートで述べようと思いついたのである。ふりかえてみれば、私はだれからも「書きかた」を教わったことなど一度もない。しかし、三十年もいろいろな文章を書いてくると、私なりのルールができてきている。このルールが私の個人的なものなら私の胸に収めておけばよい。しかし、もし一般性があるとなれば、それは私個人のものとしてしまっておくのではなくて、公にすべきであろう。そこから若い研究者や院生がなにか得るところがあれば、なにがしかの意味があらうからである。

これまでで私がいちばん苦労したのは卒業論文であり修士論文であった。なにしろ生れて始めて書く論文だったのだから、

御多分に洩れず、まずは『論文の書きかた』などという本を読んだものである。しかし、それらの本は「原稿用紙の使いかた」だとか、「起承転結にしてまとめよ」だとか、要するに、高校の国語科で学習したことの焼きなおしにすぎなくて、ほとんど役に立たなかった。それはそうだ、だいたいその種の本は、三流研究者がアルバイトで書いた本にすぎないからである。

しかし、谷崎潤一郎の『文章読本』とか、丹羽文雄の『小説作法』といった本は、さすがに一代の文人の作品だけあって、ずいぶんとおもしろい役に立つ。とりわけ、丹羽文雄の『小説作法』によって、私は開眼したのである。それがどういふものであったか、記しておきたい。

大阪大学の助手や院生など若い人に、気嫌のよいとき、論文を書く秘伝を教えてやるうか、ということがある。すると、いわれた相手は必ず膝を乗り出してくる。せひ、とかなんとかいって。私は惜しむことなくこういう若い人に秘伝を公開している。しかし、考えてみれば若い人は大阪大学の連中だけではない。世にはずいぶんいる。おそらく、かつての私と同じく、どのように論文を書いてよいのかと悩んでいる人もいるにちがいない。とすれば、大阪大学の者だけなどとけちなことをいわす、全国の若い研究者に秘伝を公開するのも一興というものである。公開しておこう。

ただし、ここでは秘伝だけを示すわけであって、それをどう

具体化してゆくかという点については、述べる紙幅がない。いずれそのうちに述べてゆくが。

さて秘伝。実は案外シンプルなのである。しかし、シンプルということは、シンプルすぎてその真髄を理解するのがかえってむづかしいということにもなる。

この秘伝は、実は前記の丹羽文雄の『小説作法』から得たものである。興味ある人は同書を一読することを勧める。

丹羽文雄は、小説を書こうと思えば書き始めたならば、途中でいやになっても「ともかく最後まで書け」と教えている。みごとに骨である。論文の場合も「ともかく最後まで書く」——これが骨である。最高の秘伝である。

この秘伝を聞いて、なんだつまらぬ、と思う人があることだろう。そういう人は、おそらく、実作経験の浅い人である。相当地に実作経験を積んだ人なら、ぎっとその意味の重さがわかるであろう。

私の書齋には、書きかけのまま貯めたもの、題名や目次だけのもの……そういった残骸がいくつもある。ついに日の目を見なかった私の死児である。

「ともかく最後まで書く」——これを自分の秘伝とし相当に実行しながらも、なおかつ流産したのである。それほど、一つのテーマのものを最後まで書ききってしまうのは、たいへんむづかしくて、しんどい作業なのである。

というのも、途中でやめたくなる誘惑があるからである。た

とえば、自己嫌悪。書いていて、なんだか内容がつまらないと思いたしてくる。この程度のものか、そう思いたすともうためである。いつしか書きかけのままとなってゆく。あるいはまた心中の賊すなわち怠けごろである。ついビールを一杯となつて、なんだか書いていること自身に空しさを覚える——などという自己合理化をして、いつしかやめてしまう。これらは私自身の経験である。

こうした欠点を乗り越えるためには、いくつかの方法がある。いちばんてっとり早いのは、原稿期限を厳守することではある。私は気が小さいので期限を守り、締切りに追われることはあまりない。しかし、そうした締切厳守は二番目の術である。一番目の術は、あくまでも自主的に書くという自己管理であることはいうまでもない。そのあたりになると精神主義になつてきかぬないので、さしあたりはストップしておこう。

では、ともかく最後まで書ききるとどういう利点があるのか。これは多い。いったん書ききると、ともかく始終がそろつて

いるのだから、あとからいくらでも手を入れることができる。第一、書いている途中、ここは弱いな、ここは論証不十分、ここは言いすぎ……こういうふうに、執筆者自身が自分の論文の欠点を知ることになる。とすれば、ともかくの完成後、そうした弱点を補なえばよい。

同じく補なうといつても、書いたあとで補うのと、書いている途中で補なうのとでは、天と地ほどの差がある。書いている途中で補なうと、論文の全体像が見えなくなりがちである。

私は、研究論文にせよ、売文にせよ、執筆の途中では、補なわない。脱稿後補なうことにしている。とにもかくにも、ゴールインを先にすることにしている。私は、これまで雑文まで書いて相当量を書いてきている。比較的には多い方であろう。それが可能だったのは、「ともかく最後まで書く」という己れの秘伝を信頼してきたからである。若い人にくりかえし言おう。とにもかくにも、最後まで書ききれ、と。